No.3	高度化		
氏名	新山　大河	産業社会学部	3回生

１．出願時のテーマ･目標を具体的に記述してください。

「ライブハウスとコロナウイルスーーコロナウイルス禍における、音楽業界人の生活史収集と分析ーー」 2020年2月中旬に、大阪府京橋のライブハウス「Arc」で新型コロナウイルスの集団感染が起こった。この出来事は大々的に報道され、政府の発表した感染リスクの高い場所「三密(密閉・密接・密集)」を全て備えるとして、ライブハウスや音楽業界は強くバッシングを受けている。またコロナ禍ではライブハウスへ補償のガイドラインが明示されないまま、営業の自粛要請が発表された。営業を続けるライブハウスへは、誹謗中傷の貼り紙、ゴミの投機などが起き、社会問題となった。そのような状況が続き、京都三条にあった老舗「Voxhall」、2016年に以学館で特別講義を行った山口一郎氏が率いるロックバンド「サカナクション」ら輩出した北海道の「COLONY」など、ライブハウスが立て続けに閉店を余儀なくされた。

他にコロナ禍における音楽業界の報道で注目が集まったのは、アーティスト「星野源」がステイホーム期間を盛り上げるために、「うちで踊ろう」という楽曲を公開したことである。そのようなトップアーティストと、ライブハウスバッシングへは関心が集まっている。

しかし多くの音楽業界の人々がコロナ禍をどのように体験しているかについては、ほとんど明らかにされていない。そこで今回の申請活動では、音楽業界関係者に生活史の聞き取り調査を行う。

２．上述のテーマ･目標を実現するために実施した計画を具体的に記述してください。

7,8月　音楽社会学、文化社会学の文献を購入し、先行研究をまとめる
9月　筑摩書房より出版される岸政彦監修「東京の生活史」プロジェクト(7で細術)のインタビュワーとして採用され、研究のアウトプットを確保する
10月　対面での調査を断念し、インタビューをオンラインで開始
11,12月　インタビューを行いつつ、先行研究との比較、差異化を行える箇所を模索する
1月　論文執筆
2月　出版原稿提出

５．今回（今年度）の取り組みについて、今後の活動展開と展望を記述してください。

引き続き、正課、正課外を問わずに音楽業界の人々の生活史調査、研究を続け予定である。現状では音楽社会学、文化社会学の観点からライブハウス関係者に聞き取りを行い、論文を書くことができるようになった。コロナ禍において、法学や経済学では政策自体の内容や、その効果が研究されたり考察されたりする。一方で申請者が行ったフィールドワークは、コロナ禍の政策がどう受容されたのかを記述することができる唯一の手段である。それは法や経済という特定の権力システムとは別の基準に存在している現実を記述するものであり、これは当事者との対話を通じてのみしか、理解が不可能なものである。本活動ではそれを、一人一人の人生の断片を集めることで(もちろん一般化、抽象化のできない不完全なものの)その一端を記述することができた。今後はここに「夢追い」型進路であるバンドマンらの貧困や、ホモソーシャルなバンドマンのジェンダー規範、地域性などの視点を含めた上で、多角的な研究に勤しんで行きたい。また、今年度機会のなかった学会発表や、研究成果としての論文執筆に向けて励みたい。

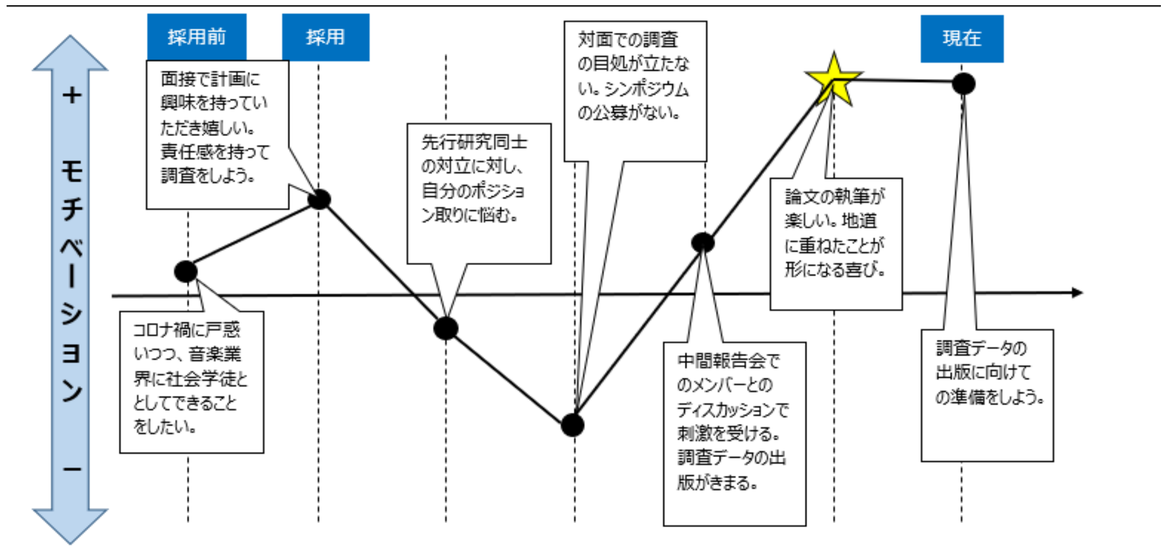
６．今回（今年度）の取り組みは、今後の学びや進路にどのように影響しますか。

私は来年から大学院への進学を希望している。今回の調査を終え、研究の作法を学ぶことができたので、これからかく卒業論文に対する姿勢にもポジティブに影響するだろう。社会学には大きく二つの調査方法がある。質的調査と量的調査である。量的調査はアンケートを基に「○○な人ほど△△だ」という知見を統計学的な立場から数学的に導くものである。一方で質的調査は調査対象と実際に言葉を交わしたりしたインタビューデータから知見を導く。人々の語りを歴史と構造に結びつけることで「他者の合理性の理解」を目指すのがこの試みの醍醐味である。私は質的調査を専門にしているが、これらの調査が結局何をしているのかというと、社会学の命題である「社会秩序はいかにして持続可能か」という問いを明らかにすることにある。社会学では、「意図せざる結果」などを吟味し、運命決定論、陰謀論を採用することなく、他でもありえた世界を記述したり、既に出来上がった秩序について明らかにする。偶然出来上がった、再現不可能なこの世界の仕組みを、一つずつ汲み取って記述していくのだ。今回の取り組みは、現在ゼミで行っている研究とは直接関係のない活動ではあるが、ゆくゆくは自分の研究成果を大きくまとめ、修士論文、博士論文と自分の名前で社会学、社会へ貢献できるように励む予定である。

７．今回（今年度）の活動が周囲に与えた影響（社会･周囲）への貢献･還元の点で記述してください。

今回の活動の成果として、調査データが『東京の生活史』という筑摩書房から2021年度に出版予定の本の1章分として出版されることが決まった。『東京の生活史』は、「東京出身のひと」「東京在住のひと」「東京にやってきたひと」から、1対1で人生と生活について聞き取る。そして現れてくる膨大な生活史を一つの本として綴じる試みである。ありがたいことに、このプロジェクトはかなりの部数が初版でも刷られる予定の大きなプロジェクトである。(ここからは未刊行の内容を含むため、一般の方が見られるHPでの公開はお控えいただきたいです)私は音楽家である男性に調査を行い、その一生を聞き取った調査データを提出する予定である。彼が現在の生活をどう体験しているのかの生活史を記述し、出版することで、１つ目は、新型コロナウイルスのパンデミック研究の蓄積として、社会に還元、貢献することができるだろう。コロナ禍は現在、芸術業界全体に大きな影響を与えている。音楽以外にも劇場、絵画、映画など、各業界が、各業界なりに危機を乗り越えようとしている。本活動では、その過程を記述することができた。２つ目は、ライブハウス研究の蓄積として、社会に還元、貢献することができるだろう。コロナ禍では、社会全体の仕組みが大きく変わりつつある。ライブハウスもその例外ではない。物品販売のオンライン化、サブスクリプションの解禁、有料のオンラインライブなどが、コロナ禍のなか大幅に進められた。コロナ禍は、間違いなく今後のライブハウス文化における決定的な分断点となる。今回の申請活動の目的であるその分断点をリアルタイムで書き残すことができた。2021年現在でしか、現在だからこそ、行える活動が達成できたと自負している。
岸政彦監修『東京の生活史』プロジェクトのお知らせ
https://www.chikumashobo.co.jp/special/tokyo_project/

３．個人の成長の軌跡3-1．取り組みの過程でどのようなことがあったのか、グラフを作成してください．



3-2．グラフで書いた☆（個人がもっとも成長したと思うポイント）では、その過程で学んだこと、気づいたことについて具体的に書いてください。

研究は、研究者の頭に仮説があって、それを検証するものだと一般的には考えられている。先行研究に触れる過程で、自分がどのポジションを取るのか、非常に不安定になった。人々の語りを収集し、そこから何か物事をいうことに対しての政治性や、語りの搾取といった権力構造に、いかに自分が誠実でいられるか、確証が得られなかったからだ。しかし、フィールドの方々と触れ合う過程で信頼関係(ラポール)を形成することができ、「フィールド」の声といったらいいのだろうか、何か必然的に自分が書かないといけないことのように感じるデータと、次々に出会うようになる。この何かに背中を押されて、フィールドで広げられる膨大な情報をなんとか自分が一つづつ手に取って、つなげ、一つのものを作らねば、と思うようになった。そこからはこれまで抱えていた課題を打破することができ、誠実にフィールドと向き合いつつ、執筆をすることができた。

3-3．”今回（今年度）の取り組み”と”正課の学びや取り組み”は、どのような関連や影響（相互作用）がありましたか？

3-2でも記述したように、今回の取り組みでは調査対象者と信頼関係をフィールドにおいて形成することができた。これは今後のインタビューで「分厚い記述」を得ることができ、データを収集し、社会学という学問共同体に貢献しうる論文を執筆する手助けとなるだろう。また今回は特に今回は芸術と災害の揺らぎ、といった観点からフィールドワークを行うことができたが、正課で研究している文化と産業の間に絶妙なバランスで存在する文化産業の脆弱性が明らかになったと感じている。これまで行っていた自身の研究では、それを逞しく、どちらかと言えば肯定的に記述していくことになるのだろうと考えていた。しかし、本活動を通じて、芸能事はどこも同じであるだろうが、音楽業界の産業構造へとも注目していくべきだとも気付かされた。今回の取り組みを通じて、自身の研究の次なる問いを立てることができた次第である。

4．本奨学金を受給したことで、以下の項目についてどのような影響を与えたか５段階で評価してください。（該当ナンバーに○）
また、併せて評価の理由も書いてください。 評価例：【 1（達成できなかった） ← 3（どちらともいえない） → 5（達成できた） 】

① 目標の達成度　５

＜理由＞当初の目的であるコロナウイルス禍での音楽業界の動向について、先行研究を咀嚼した上で幅広く調査することができた。

② 計画の達成度　４

計画では今年度中に「日本ポピュラー音楽学会」にて学会発表を行いたいと考えていた。しかし「日本ポピュラー音楽学会」は今年度、コロナ禍につきシンポジウムを中枢メンバーのみによって行い、公募の機会がなくなってしまった。そのため、結果として計画通りのアウトプットを行うことができなかった。
しかしながら、調査結果を社会に還元するため、7で細述する「東京の生活史」プロジェクトへと参加し、調査データの出版を決めることができた。

③ 取り組みを通じた自己成長　５

＜理由＞まず膨大な先行研究に触れることで、音楽業界のこれまでの歴史や変遷について把握することができた。そのため、文脈を踏まえたうえで、今回のコロナ禍が音楽業界にどういった影響を与えるのかを調査することができた。また先行研究をまとめ、これまでの研究と自分の調査データから何が言えるのかを差異化させることで、研究のイロハを学ぶことができた。

10．今年度の取り組みを通じて最も身についたと思う力について、具体的に記載してください。9の設問で回答した力でも、それ以外でも構いません。

① 身についた力

これまでの研究と、自身のデータとをすり合わせ、自分で知見を生み出すことのできる能力

② ①で記述した力について具体的に説明してください

自身のデータが何を言えるのか、それを徹底的にデータを洗うことで論理的に逆算し、組み立てていく力。

③ なぜその力を身につけることが出来たのか、成長を手助け・促進させた要因を記載してください

膨大な先行研究に、思う存分触れることができたこと。フィールドの方が快く調査に応じてくれ、お話を伺っていく中で、彼ら/彼女らとの信頼関係を築けたこと。